
魂喰らいのレイル× 2 ～ソウルイーター～

戒斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魂喰らいのレイル×2 ソウルイーター

【Nコード】

N8548M

【作者名】

戒斗

【あらすじ】

初の二次創作です。

えーっと、これはソウルイーターの二次創作です
オリキャラが主人公のぶっとんだ話になっています
原作のキャラもメインの人達はなるべく普通に出していきたいと思っています。

地道にデスサイズを目指して貰いたいな〜って言う作者の思いが届くかどうかのお話です

楽しんでいつて下さい

@注意事項は必ず読んで下さいね！

注意書き（前書き）

今回は、本文が小説自体の前書きみたいな感じなので、
大して書くことはありません・・・

今回は楽しむ要素はありませんが、ちゃんと読んでいって貰えると
嬉しいです

では、どうぞ

注意書き

本作は、ソウルイーターの二次創作です

なるべく原作のキャラを崩壊させないように努めますが、

確固たる保証は出来ないため、苦手な方は引き返すことをオススメします

主人公はオリキャラで、思いっきり飛ばしていきます

頑張りますので、是非読んで下さい

ちなみに、マンガの方は全て読めていない上に、アニメの方も最後の方と最初の方しか知らない為、原作が壊れてしまう可能性もあります

なお、他の小説と平行して書いていくので、投稿の間隔が開いてしまいかもしれませんがご理解下さい

納得のいった方だけ、当小説を楽しんで下さい

注意書き（後書き）

次回は、オリキャラ紹介です
よろしく願います

キャラ紹介（前書き）

連続投稿です

でもって前回の予告通りに今回の主人公のオリキャラを紹介します

キャラ紹介

レイル兄弟

ルシア・レイル

タクトとは双子の兄弟

げつぱく 月白色の髪のショートヘアに濡羽色ぬればいろの瞳

もえぎいろ 萌葱色の簪かんざしを好んで挿す

中世的な顔立ちで美少女でありながら、自覚は皆無常にタクトと共にいる

タクトとは、双子であり、武器と職人の関係

普段はクールだが、タクトが絡むと性格が多少は変わる為、ブラコン気味。

一人称は僕や私などで場によって使い分けるが、激怒すると俺になり男口調になる

武器化——扇

濡羽色の骨組みに月白色の扇面、萌葱色の要を持つ巨大な扇になる。さらに要から要と同色のひもが2m程のびている
遠距離戦の時に武器化する

タクト・レイル

ルシアとは双子の兄弟（どちらが上かは不明）

外見はルシアとそっくりだが、髪が微妙に短い。

ルシアと同じで中世的な顔立ちで美男子でありながら自覚は皆無普段無表情なルシアに変わって、常に笑顔を絶やさない。

常に笑っている分怒ったり無表情になったりすると不気味。

常にルシアのことを気にかけている。ルシアと同じで、多少シスコン気味

性格はルシアと正反対だが、根は同じ

武器化——鉄扇

濡羽色の巨大な鉄扇で要の部分から月白色の鎖が2 m程のびていて、先に三日月型の刃物がついている。
近距離戦時に武器化する

キャラ紹介（後書き）

この二人が原作の人達と絡みながら遊びまわります
次回からは普通の小説になっていくので、楽しんでいって下さい
よろしくお願いします

キッドと恐怖とシンメトリー（前書き）

今回は、キッド君を暴走させてみました。

キッドと恐怖とシンメトリー

「来たね、デスシティー。」

真っ暗な中で、小さな二つの声が重なる

「ここが始まりだね」

声の片方が言う

「死神様のお役に立てるな」

こちらの声の方が少し低い

「やっと僕らの存在を認めてくれる場所に來れた」

また声が重なったのを最後に、物音は一切なくなり、残ったのは何も無い闇だけ

「ハッ、口ッ、レイル兄弟。待ってたよ。早速今日から、二人には死武專に通って貰うけど、いっいっ？」

呑気な口調。

けれど二人には一番聞きたい声だった。

「「勿論です、死神様」」

異口同音とはこの事

「そ〜う〜？じゃあ早速教室に行って貰おうか〜。キッド、二人を案内してあげて〜。教室にはシュタイン君がいて、生徒達に話はあると思うから〜」

・・・ツあれ？返事が来ない。

「キッド〜？」

死神様の側に控えていた黒髪に不思議な三本の線のある僕らと同じぐらいの年齢の少年。

僕らを凝視している。

「ッハイ！何だ？父上。」

やっと気付いた。

「だ〜か〜ら〜、悪いんだけど、この二人を教室まで案内してあげて。」

「分かりました。」

その後ついてこいと言うように僕らの方をちらりと見て背を向けた

「彼はね、僕の息子のデス・ザ・キッド。分からないことがあったら何でも聞いてね、昨日のうちに、二人のことは多少話してあるから、多分話し相手になってくれるよ」

「分かりました。お気遣い有り難うございます。死神様」

「……キッドが背を向ける前に言うべきじゃないかなあと思いついた。僕らはまた口を揃えた」

死神様に一礼して僕らは出て行ってしまったキッドを慌てて追いかけた。

「そう言えば、キッドにレイル兄弟の名前、教えたっけ」

二人が出て行った後に呟いたこの一言に、一人のデスサイズがズッコケタのは内緒のお話

「待たせてしまってごめんなさい」

死神様のお部屋を出ると、ドアのところで、デス・ザ・キッドが待っていた。

謝るとまた凝視された。

「何？」

「……ところで、名前を聞いていないんだが？」

……

「は？」

「いや、だから、君らの名前を聞いていないんだが？」

「僕らの名前？」

「そうだ。君らの名前を教えてください」

「死神様から」

「聞いてないの？」

キッドはこの時初めて、この二人の個々の声を聞いた

「聞いていないな」

「昨日のうちに説明しておいたって聞いたんだけど。」

「明日から、レイル兄弟って言う双子の生徒が来るからよろしくね
くって言うモノなら。」

……

「ルシア・レイルです」

「タクト・レイルです」

「俺はデス・ザ・キッドだ。よろしく頼む」

「「よろしく願います」」

そう言つて、僕らは差し伸べられた手を戸惑いながらもしっかりと握った。

今まで僕らは人と関わったことがほとんど無いから、こつこつ事には慣れていない。

たまにどうすればいいのか分からなくなる。

自己紹介が終わってから、キッドは多少喋るようになった。

けど、

何故か僕らの方をよく見てくる？

何で？

確かに僕らは一卵性の双子で、そっくりで、無表情で黙っているとどっちがどっちか分からないけど、ここまで凝視されたり、チラチラ見られたりするのとは気分が悪い。

「「キッド君？僕ら、何か変？」」

「エッ？」

「さっきから」

「何かこつち見てるから」

「すごく気になるんだけど」

「……………ちょっといいか？」

「「？」」

僕らの答えは聞かず、顔をしかめながらこちらへ近寄ってくる。

自然と後ずさる僕ら。

いつの間にか横に並ばされる

僕の髪にしてあった萌葱色の簪がいつの間にか抜き取られる

服に付いていたらしい埃や小さなゴミがいくつか一瞬にして取り払われる

多少着崩していたコートも直される

ここまでかかった時間およそ二秒

もしかしたら、他の事もされているかもしれないが、なにぶん早すぎて分からない。

「か、」

「「か？」」

またしても異口同音に揃う。

「完璧だー」

「「？」」

何が？

っていうか、僕らは何をされたんだ？

「この完璧なシンメトリー。すんばらしいー」

.....

シン...メト...リー？

「シンメトリーって」

「あの左右対称の」

「「あのシンメトリー？」」

僕らは顔を見合わせて同時に首をかしげる。

いや、正確には、かしげようとした、だ。

かしげる前にキッドに頭を捕まれ強制的に前を向かされる。

一瞬見たキッドの顔は鬼の様な形相だった。

しかしそれも束の間、僕らが前を向いた途端に幸せそうな顔に変わって、僕らを眺める。

ここまで来れば嫌でも分かる。

キッドはシンメトリーが大好き……どころではなくそれに異様な執着があるのだ。僕らは今までなかったキッドへの感情に小さな‘恐怖’を付け足した。

このままだとずっと逃げられないかもしれない、という予感が頭をよぎった。

（（もう誰でも良いから僕らがキレてキッド君を手にかける前に助けて））

助けを求める心の声も重なっている。

でもって微妙にずれている……気がするのは 作者^{わたし}だけでしょうか？

（（何でもいいから、早く解放して））

キッドと恐怖とシンメトリー（後書き）

グダグダですみません。

感想下さい。

救いの手、トンプソン姉妹（前書き）

やったー

今日二話目の投稿ダー

このペースがこのまま続いていくといいなあ
っていうことで楽しんでいって下さい

救いの手、トンプソン姉妹

「お、いたいた。って、こらキッド、なーにしてんだよ」

「アハハハキッド君（また）暴走してる」

今、聞こえそうに聞こえなかった言葉に、僕らの予想が当たっていることを確信した。

「おお、リズ、パティ」

しめた。僕らからキッドの気が一瞬逸れた。

僕らは急いで無理矢理整えられた服やらなんやらを直した。

「見てくれ、素晴らしいだろう。完璧なシンメトリーだ……」

キッドが再びこちらを振り向いたときには僕らは既に元に戻っていた。

キッドが文句を言おうとする前にキッドの気を僕らから逸らしてくれた女の人の背の高い方が、前に出てきた。

「悪かったな、キッドの暴走に巻き込みまっつて。こんなんだけど根は良い奴なんだ、勘弁してやってくれ。」

顔の前で手を合わせて謝られる。

慣れていない僕らは、やっぱり顔を見合わせて首をかしげる。今度

は邪魔も入らず、そのまま自然に前を向く。

「「助けてくれて、ありがとうございました」」

彼女たちは僕らのことを助けてくれた。

恩を仇で返すような真似はしない。僕らの考えは決まっている

「あなたがそこまで言うなら」

「キッド君にキレルの」

「「我慢します。」」

ちよつと呆気にとられたような表情。 & a m p ・ちよつとした沈黙。

「...あ...ああ、ありがとうな」

「アリガト」

僕らを助けてくれたもう一人の人。

こちらはまだ幼さの残る顔立ちで、少女と呼んでもいいくらいだ。

後ろの方で凹んでいたキッドの方へ行ってしまった。

「「あの、教室まで案内してもらえませんか？」」

またキッドに案内してもらうのはなんか嫌だ。

キッドを一瞥して、僕は女の人に向き直った。

「いいよ」

キッドの横から声が聞こえた。・・・・・・聞いていたんだ・・

「って、こらパティ、何勝手に言ってるんだ」

「ダメですか？」

何故か周りには、生徒達がない。つまり、僕らが頼れるのはこの人達だけ。

ここで断られたら僕は一生教室とやらにつけない。

どうしても承諾して貰わねば。

「ダメって訳じゃないけど・・・・・・あんたら誰だ？」

ああ、そう言うことか。

僕らは何者か分らないから、教室まで案内するのを渋ってたのか。

「今日から死武専に」

「編入することになりました」

「レイルです」

・・・・・・これで分かってくれるといいなあと思いつなが

ら僕は答えた。

「ご丁寧にも。私はキッドの武器でエリザベス・トンプソンだ
こっちは妹のパトリシア。通称は、私がリズで、こっちはパティだ。
よろしくな」

今日二回目の握手を求められる。

やっぱり慣れない、それでも僕は一回目よりも自然に手を握り返
せたと思った。

「…………タクト・レイルです」

「ルシア・レイルです」

「…………よろしくお願いします」

「それじゃあ行こうか。もう授業始まってたんだが、キッドが遅い
から呼びに来たんだ。普段ならそんなことシュタイン先生は言わな
いから、なんか変だと思ったらしい事だったんだな。」

最初の方は僕らに向けられた言葉なのだろうが、後の方は独り言の

ように聞こえた。

「こづいうこと?」

聞いたのはタクトだった。

もともと僕よりもタクトの方がまだ喋る方だ。

それに、いつも無表情な僕と違ってあまり笑顔を崩さないから、滅多にない人付き合いの時は、だいたいタクトが会話をしてくれていた。

「シュタイン先生は、キッドがシンメトリーに目がないことを知ってるんだよ。……にしても人が悪いな。転校生が来るなら来ると教えといてくれればいいモノを」

今から考えたら、微妙ににやついていた気がしないでもないが、いつものことかもと思い直す。

「聞いていなかったんですか?」

もう暫く僕は喋らなくても大丈夫そうだ。

「聞いてない」

「きくてないよっ」

全く別のリズムの言葉が重なる。

僕らは歩きながら、また顔を見合わせた。

ため息を吐きたい気分だ

死神様は、シユタイン先生という人が生徒達に説明をしておくから大丈夫と言ったのに。

「……………っにしても、二人とも本当にそっくりだな」

「「え?」「」

いきなり話が変わったので、喋らないでいようと思っていたのに、つい声が出てしまった。

「服装と、微妙な髪の長さの違いがなけりや見分けつかねえぞ」

………知ってる。僕らがそっくりなもの、見分けが付きにくいのも。

違いを少ししか作っていないから。

「……………あ、あと表情も違う。タクトの方はいつも笑ってるけど、ルシアは無表情だ。せつかく綺麗な顔してんだから、笑えばいいのに」

このときつと僕は相当困った顔をしていただろう。

顔形なんてハッキリ言ってどうでもいい。

どんな反応をすればいいのかわからなかった。

リズが前を向いて歩いてくれていて良かった。

そんなこんなで僕らは一つの扉の前まで来た。

「ここがあたしらの教室だ。」

「「ここが・・・」」

ここが僕らのこれからの居場所

救いの手、トンプソン姉妹（後書き）

次話もなるべく早く投稿できるように頑張ります

お気に入り小説に一人の人がしてくれたみたいです。
すごく嬉しい

勿体ないくらいです

ありがとうございます

転校生とシュタイン博士

ガチャ

（どうして扉を開けたのが、さっきまで最後尾でへこんでいたキッドなんだろう？一番前を歩いていたらズが開けないか？普通。）

と思いながら最後尾になった僕らが思っていたのは内緒の方向で

「お、やっと来ましたね」

部屋の中から聞こえてきたのは男の人の声。

チラと見ると、頭にネジが突き刺さっているは、身体中ツギハギだらけだはで、可笑しいところばかりだ。

でも、こちらに向けた笑顔はとても優しくそうだった。

まともなのか、可笑しいのか、どちらともつかない人だ。……っていうのが、僕らがシュタイン博士に抱いた最初の感想。

「そんなところに突っ立ってないで中に入ってきてください。みんなに紹介しますから。」

途端に辺りが騒がしくなった。

「何の話？」「紹介っていったい何の？」

などと言う言葉が僕らのいるところまで聞こえてきた。

（（……編入生が来るって聞いてないのか？））

リズが、聞いてないと言っていたから期待はしていなかったが……

「何してるんですか？早く中に入ってください」

今度は一瞬にして静かになった。さっきとは打って変わって、僕らが入ってくるのを待っている。

すごく入りにくい雰囲気。

（（帰りたい））

僕らは同時に足を踏み出した。

髪の色やら見た目やら、さらに双子だって言うのが分かった瞬間また騒がしくなった。

でもそれも先生がしゃべり出すまで。

「はいじゃあ、転校生を紹介します。レイル兄弟です」

「タクト・レイル」

「ルシア・レイル」

簡単な自己紹介で終わらせる

「はい、簡単な自己紹介をありがとう。僕がこのクラスの担任をや

っているフランケン・シュタインです。よろしくちょうだいから質問がある人は今彼らに聞いてあげて。」

「……後々集られるのは面倒だけど、ここで立ったまま答えるのも面倒だ。」

助けを求めたいけど、リス達はもう既に席に着いてしまっていて隣にはいない。

対抗策を考えている内に手がチラホラ挙がってくる。

「じゃあ……マカ。」

その内の一人をシュタイン博士が指す。

ベージュの髪を、ツインテールに結った緑の目が綺麗な女の子だった。

「ハイ。マカ・アルバーンです。えーっと、二人は職人？それとも武器？」

面倒だ。大した対抗策もない。

「「僕」（私）達は武器であり、職人だ。」

僕は、こういう人前では一人称を僕から私に変える。タクトとかぶらないから、聞きにくくて面倒だ。

この答えを言うと、分かってくれる人と理解してくれない人がいる。

この教室にいる人もその二つに分かれているようだった。

でも、マカは分かってくれたらしく、何も聞かずにありがとうとだけ言って再び座った。

「他に何か質問はありませんか？」

シユタイン博士はさらに質問を催促するが、僕らはもう既に嫌気がさしていた。

また数人の手が挙がる。

（（今すぐ逃げ出したい））

「えーっと、じゃあ……ブラック スター」

僕らの願いも虚しく質問タイムは続行する。

「おう！俺様はブラック スターだ。さっきの質問の答えの意味が分からん。詳しく説明してくれ！」

超俺様気質来たー

めんどくさい。

「僕らはどちらも武器で」

「近距離戦と遠距離戦で使い分けている。」

「「分かった？」」

これだけ説明すれば分かってくれたかな？

……納得いかない様な顔をしている。

隣に座っていた髪の長い女の子が詳しく教えているらしく、一応座ってくれた。

もういい加減このくだらない質問タイムは終わりにしてほしい。

「他に何か質……と思いましたが、時間ももうあまりありませんからこれで終わりにします。最後にこの二人が死武専に慣れるまで面倒を見てくれる人は誰か居ませんか？」

（（別に要らない））

でもそんな思い、誰かが察してくれるはずはなく、肝心の僕らをおいて話は進んでいく。

「……………何で誰も手を挙げてくれないんでしょうね」

（（そのまま誰も手を挙げるなよ））

この時点で、シュタイン博士の印象がかなり悪くなっていた。

「仕方ありませんね、分からないことがあれば周りにいる人に聞くように、で、ちゃんと答えてあげるようにして下さい」

僕らに向けられた前半の言葉に頷いた。

「じゃあ、次からテキトーなところに座って下さい。解散」

この言葉で、僕らはやっと解放された。

多分僕らが席に着くことは滅多にない。授業に出る気がないし出る必要もない。

僕らの目的は唯一つ、鬼神の卵と化した99個の魂と魔女の魂1個を手に入れて、デスサイズとなって、死神様のお役にたつこと。

それが僕らの至高の喜び。

転校生とシュタイン博士（後書き）

はいそうです。レイル兄弟はとことんめんどくさがりやさんです。
次回は頑張っで、もうちょい原作の人を出したいです。

・・・・・・・・・・・・・・・・出来るといいなあ

プチギレ寸前タクトVSブラック スター（前書き）

もうなんか色々とぶっとんじやってます

でもって超短いです

ではどうぞ

ブチギレ寸前タクトVSブラック スター

「ルシアちゃん、タクト君……だったよね？さっきも言ったけど私はマカ。こっちは相棒のソウル。よろしくね」

「よろしくな」

教室を抜け出そうとしたら、そんな風に声をかけられた。

さっき質問をしてきた女の子だ。

「……………よろしく」

僕らはこのとき、必要以上に警戒していた。

いつものことだ。僕らの周りには信頼できる人が殆ど居なかった。

初めて会った人間を警戒するのは普通のこと。

死神様は僕らの信用できる数少ない人。

「二人は武器化するとどういう形状になるの？」

マカっていうこの女の子は、きっと僕らが緊張しているとても思っただろう。

僕らが話しやすいようにしているらしい。

「「扇」」

一言。

だって僕らは緊張しているわけではなく、マカとソウルを警戒しているんだ。

必要以上のことを話す気はない。

「扇つて、武器になんのか？」

（（失礼な。なんなかったら、武器にならない））

僕らは無言でソウルを軽く睨む。

それが気に入らなかつたらしく、文句を言おうとでもしたのかソウルが口を開いた。

が、その口から言葉が出てくることはなかった。

理由は簡単。

「おい転校生、俺様より目立つなんて気にいらねえ！」

「ちょっと、ブラック スター……………」

……………今度はさっきの俺様気質の超面
倒くさいヤツか。

「何の用？」

僕はもう喋る気もなかったが、タクトが代弁してくれた。

……が、

（もうそろそろ限界か）

その声から、タクトがキレル寸前なのは余裕で窺えた。

（早く向こうが引いてくれれば良いが……）

表情はいつもと変わらずにこやかな笑顔だが、声にイライラが滲み出ている。

自分達の形を変に言われただけでもいらついているのに、もう後一言一言向こうが僕らに突っかってきたら確実にキレル。

「新参者のくせに、俺より目立つなんて良い根性してるじゃねえか。あゝあ、どうなんだよ。」

こっちだって好きで目立つてる分けじゃない。そんなに目立ちたいなら変わってほしいくらいだ。

「ち、ちよつと、ブラック スター……」

隣で頭を抱えているのはこいつのパートナーだろうか。

だとしたら気苦労が絶えないだろうな。

「好きで目立っている分けじゃない。」

あああゝ顔が無表情になっちゃったや。どうか喧嘩にだけはなりませんように。

「気に入らねえな」

「それで？俺らには関係ないね。」

これは本格的にヤバイ。

一人称が僕から俺に変わった。

タクトは、普段は笑顔を崩さないが比較的……ものすごくキレやすい。

しかもキレたら手におえない。

はつきり言ってたちが悪い。

「……タクトおさえて。ここは死神様のテリトリー、壊しちゃダメ。」

これくらいじゃ収まらないことは百も承知。

それでも一応声はかける。

「分かってる、壊しはしない。けど……」

因みに僕らの会話は物凄く小声で行われているから、相手には僕の口が動いているようにしか見えない。

「何喋ってやがる。表へ出る。ぶっ潰してやる。」

僕が相手の神経逆撫でしてどうする。

「上等だ。」

（どうしよう）

ルシアと、ブラック スターのパートナーであろう女子の心の声が重なったのを知るものはいない。

ブチギレ寸前タクトVSブラック スター（後書き）

次回は戦闘になるのかな？

決闘！ルシアVSブラック スター（前書き）

ハロハロ！

7話目の投稿です

超駄文に仕上がりました。ごめんなさい
それでもよろしければどうぞ

決闘！ルシアVSブラック スター

ここは少し前にキッドVSブラック スター&ソウル・イーター戦が行われた死武專の入り口前。

「武器は無しで素手での決闘でどうだ？」

「却下だ。絶対に認めない」

即答。しかし答えたのは、タクトではなく僕だ。

タクトは基本遠距離戦の時に職人として僕を武器として扱う。

逆に、接近戦時の職人は僕だ。

肩の入れ墨を見れば分かる。タクトに喧嘩を売ってきたこいつは星族の生き残りだ。

暗殺を生業としていた一族の生き残り。そんな奴と素手でやり合うのはタクトには分が悪い。

「関係ない奴は黙ってる」

「関係あるね。僕はタクトの職人だ。職人と武器がやり合うのはフェアじゃない」

喧嘩を止めるのは無駄だというのが分かっている。

でもタクトに不利な喧嘩は認めない。

絶対に

「こいつも職人なんだろう？」

「直接敵とやり合うのは僕の仕事だ。タクトは遠距離においてその力が発揮される職人だ。お前とタクトが素手でやり合うなんて絶対に認めない。自分の武器であり職人であるタクトを、そんな危険な賭に投げ出したりしない。」

普段はあまり喋らないもんだから急に大量に喋ると疲れるんだよ。

僕は背中にタクトを庇うような形で前に出る。

ブラック スターの苛立ちが募ろつがここまで来たらもう関係ない。

「お前は自分より目立っている僕らに対して怒っているんだろう？
だったら、僕が相手をしてやる。タクトとやり合いたいのならタクトを武器としてお前と戦^やってやる」

目で文句はあるか？と尋ねる。

タクトは何も言わない。

「いいぜ。負けた後にそんなことを言い訳にされるのは嫌だからな。
逃げ道を消したこと後悔するなよ。」

「僕らだけが武器を使うのはフェアじゃない。武器の使用はそちらの自由だ。それから、ソウル・イーターお前も僕らに何か言いたいことがあったんだろう？言ってすむなら別にいいが、お前も戦^やり合いたいなら同時に来い。別々では面倒だ」

ここまで言い切って息をつく。疲れた。戦闘なんかよりも喋る方がよっぽど疲れる。

前半は目の前のブラック スターに、後半はその後ろの方で傍観者と化していたソウルに向かって投げた。

「遠慮しておくよ。眺めている方が楽しそうだ。」

無難な答えだ。

僕だって、実際は眺めていたい。

本当に面倒だ。

「タクト、それでいい？」

タクトは無言で僕に微笑みかける。

僕に向かって手を差し出し僕はその手の中で武器化した。

「椿！」

「はい」

短い会話。けれどこの二人の間では十分だったのだろう。一瞬後にはブラック スターの手の中に二つの小さな鎖が鎖でつながっている武器、鎖鎌があった。

「その鎖鎌……それに椿というと、中務家のご令嬢？」

「私のことを知っているの？」

知っているも何も・・・・・・・・・・

「俺らに勝ったら教えてあげるよ。俺らとキミの関係。・・・・・・・・
・・・・・・・・・・いくよ」

巨大な扇それが僕の武器化した姿。タクトは自分の身長より大きい
扇^{ぼく}を広げ、振るい風をおこす。

僕らのフィールドの完成だ。

僕らは武器と職人の関係を入れ替えた。

人に戻った僕の手の中にあるのは月白色の鎖が要からのびる濡羽色
の鉄扇。鎖は普段は2mぐらいだが、伸縮自在。先についた三日月
型の小さな刃も大きさは自在。これが僕の武器。

ここまでの動作が一瞬で行われた。最初の合図で向かってきたブラ
ックスターは風の影響で立ち往生している。この風は一度おこし
たら、戦闘終了か、私が倒れるまで止むことはない。

相手の動きを僕に教え、制限し、僕のスピードを上げる。

「くっそう、邪魔くせえ風だ。」

僕の目の前までブラックスターが来ている・・・・・・・・・・が、僕ま
で刃が届かない。

僕らの魂の波長が起こしている風。これがある限りブラック スター程度の實力では僕には勝てない。

「あんなに大口叩いていたのにこの程度？そんなんじゃ、いつまで経ってもここまで来られないよ」

何もないのもつまらない。ずっと突っ立っているのも退屈だ。

風を少しだけおさえてみることにした。

やっと僕の所まで、ブラック スターの鎌がとどいた。

ガキンッ

鉄扇でそれを抑える。金属同士がぶつかり合う音。戦っているという実感。

「良くここまで来れたね、ブラック スター。けど、最初の風を攻略できない限りは、君に勝ち目はないよっ」

言葉を言い終わると同時に僕は鉄扇の要からのびる鎖をブラック スターに向けて投げつけた。

それをもう一方の鎌で防ぐ、が、鎖はそのまま鎌に巻き付いた。ただの鎖なら、それで十分に防げるだろう……。が、この鎖の先には三日月型の刃がついている。巨大化して首を狙うことも出来るが、さすがにそこまではせず小さなキズを頬に残す程度にした。

（さすが暗殺人。刃の気配に気付いたか）

刃を見もせずに軽く避ける。

「流石、中務家のご令嬢に星族の生き残りと言ったところかな？　そう思わない？　タクト。」

タクトに話しかけながら、ブラック　スターの持つ鎌に巻き付いた鎖を引く。

ブラック　スターがバランスを崩したところで鉄扇を叩き込む。

『そうだね。魂の波長も安定しているしいいコンビだ。……………楽しいな』

これかわされ、巻き付いていた鎖も解けてしまう。

「ああ。久々だよこんなに楽しい戦いは。死武專、ここに来て良かった」

『そうだねっ…………と、ルシア、前見て集中！　怪我しないように気をつけて』

（心配無用）

僕はブラック　スターには負けないよ。相手は大事なタクトに喧嘩を売った大馬鹿者だ。

隠してはいたけど、僕だってかなり怒ってる。

「お前ら！　この俺様を無視するとは何事だ！…………椿！　モード忍者刀」

『はい!』

やっぱり二人だけで会話するのは相手からしたら気分が悪いのだから。

面白いや、ぶちのめしてしまつには勿体ないくらいだ。

もつと遊んでいたけれど疲れてきちゃった。

「タクト、疲れてきた。どうしよう?もつと遊んで相手の実力測る?」

それとも……

「何をゴチャゴチャ喋ってんだ!余所見してんじゃねえ!」

余所見するなって……どう考えても無理でしょう。退屈なんでもん。

僕らが話している間じゅう短刀らしき物で切りつけてきてたけど、鉄扇を使う必要も無い。ただ軽く避ければいいだけだ。

「ねえ、星族って死武専に滅ばされたんでしょ?何で生き残りが、仇であるはずの死武専にいるの?」

退屈ついでに僕はブラック スターを見た瞬間から抱いていた疑問を投げかけた。

星族は、越えてはいけない一線を越えたがために死武専に滅ばされた。

ブラック スターからしたら親も親戚もみんな死武専に殺されたんだ。逆恨みではあるが死武専を恨み、憎んだとしても何ら不思議はない。

なのに今、ブラック スターは死武専に身をおいている。

僕はそれが不思議で仕方ない。

「親父もお袋も越えちゃいけねえ一線を越えちまった。力を求めて、鬼神のへの道を進んじまった。だから殺された、当然の結果だ。」

「『強いんだな。……尊敬するよ、僕らと君の状況は似ているようで全く違う』」

「なんの話だ？集中しやがれ！」

「……段々とブラック スターのスピードが上がってきた。僕の風を少しずつ克服してきた。

成長が早い。

僕に向けられた短刀を紙一重で交わしていく。

「サービスだ、風を弱めてやる。お前の得意な体術でやり合ってみたくなった。……退屈させるなよ」

そう言つて、僕は自分の周りに吹き荒れていた風を今度は完全に消し去った。

「タクト！行くよ！」『魂の共鳴！！！！』」

力が溢れてくる。なんでも出来そうな気がしてくる。

あふれ出てきた力を手と足に集中する。

地面を蹴り、一

瞬でブラック スターの懐にもぐり込む。

「ぐはっ！」

そのまますれ違い、去り際に手に溜めておいた魂の波長を叩き込む。

僕らの波長は強力すぎるし、特殊で波長が噛み合う人も少ない。その為、一発叩き込むだけでもかなりの威力を発揮する。

「ブラック スター！！！」

案の定ブラック スターは地に伏せる。

本当にいいコンビだ。僕の波長を叩き込んだのに、ブラック スターの波長が乱れても樁の波長が上手いことカバーしている。

でも、僕らの波長を喰らってすぐに立ち直れるわけではない。

僕はブラック スターの側まで歩いて行き、その首に鉄扇を当てる。

「終わっ！！！」

決闘の終了を宣言しようとした時だ。

気付いたら、ブラック スター息も絶え絶えで僕の首に忍者刀を当てていた。

ブラック スターが動けないと思って油断した。

「俺……の……勝ち……だ」

僕らにはない勝利への強い執念。……………少しだけ羨ましいと
思ってしまう自分がある。

『ここに決闘の終了を宣言します』

椿の宣言。

ドサリ

……………ドサリ？

決闘！ルシアVSブラック スター（後書き）

戦闘のはずなのに、その描写が少ないのは何でだろう。

しかもブラック スターが弱く書かれている気がする。

本当はもっと強いんですよ。

私がダメダメなだけです

．．．．．まだ強くなる前って言うことにしておいてください．．．

ブラック スターの執念 レイル兄弟の真意 キッドの疑問（前書き）

サブタイトルが意味不明でごめんなさい

でもって短くてごめんなさい

謝ってばっかでごめんなさい

ではどうぞ…………ごめんなさい

ブラック スターの執念 レイル兄弟の真意 キッドの疑問

……ドサリ？

「ブラック スター！大丈夫？」

僕らが音の正体に気付く前に椿が倒れたブラック スターを抱えた。

「楽しかった。……ありがとう、それからごめんなさい。大丈夫？」

ブラック スターが倒れたのはまぎれもなく僕の所為だ。魂の波長を打ち込む前に共鳴なんてするんじゃないかと、今さら悔いて見るのも遅い。

「少しどころじゃなく、最後の一撃はやりすぎてしまいました。大事はないと思うけど、少しだけ安静にしていして下さい。」

「はい、分かりました。大丈夫ですよ、それにブラック スターの売った喧嘩の相手をしてくれてありがとうございます。」

そう言いながら椿は僕らに笑いかけてきた。小さく、綺麗に微笑みながら。

「僕も少しどころじゃなくイライラしていたから、おあいこだ。」

そう言ったのは僕ではなく、いつの間にか人間の姿に戻っていたタクトだった。

口調が俺から僕に戻っているところを見ると、もう既に怒りは収まっているらしい。

「約束…通り教え…てもらうぞ、椿…とお前らの関…係。」

ブラック スターが無理矢理起き上がろうとしてくる。…が、息も絶え絶えで満足にいかない。

椿が慌てて肩を貸し、やつのことで立ち上がる。

「大丈夫か？無理はしない方がいい。さっきはやりすぎた……。悪かった。」

ブラック スター、もう起き上がってきたか。……早い。異常なくらいに。僕の魂の波長をくらって意識があるだけでも驚きなのに。

「はい、約束ですからね、教えられることは全部教えますよ、椿さんのこと以外にも出来る限りの答えますから、聞きたいことは全部聞いてください。……ただ、また今度でも良いですか？ルシアが疲れてしまったらしくて、そのうち招待しますから家へ来てもらえますか？」

二人が頷くのを見てタクトは背を向けて立ち去ろうとした……が、

「ルシア？どうした？」

僕はタクトの袖を掴んでそれを止めた。

「ブラック スターだったよな？一つ聞きたい事がある。いいか？」

僕なりに出した結論を確かめたかった。

「いいぜ、なんだ？」

ブラック スターの勝利への執着の理由。

「君があそこまで勝利へ執着したのは自分のパートナーのためか？」

勝利後の第一声を聞いたとき、目立ちたがり屋のブラック スターが言ったものとは思えなかった。

「椿が知リたそうにしていたからな。……聞きたいことって言うのはそれだけか？」

「ああ、ありがとう。良いパートナーを持ったな。」

そして今度は僕も背を向けて立ち去ろうとした。

「待て。」

今回止めたのはブラック スター。

体はそのまま顔だけブラック スター達の方に向ける。

「今度は、本気のお前らに勝ってやるからな。覚悟しておけよ。」

言葉の代わりに後ろ手を振り、軽く微笑みレイル兄弟は立ち去った。

「よう、ブラック スターまた勝ったな。やったじゃん。」

「お疲れ」

かわりに俺らのところに来たのはマカとソウルの二人だった。

でも、二人の声は届かない。

「なあ、椿。あいつらどう思った？」

「強かった、凄く。」

そう、あいつらは本当に強かった。

「また戦^やりあいてーな」

「ルシア、最後の一撃、何で避けなかった？僕でも見えていたんだから、ルシアにも見えていたんだろ？」

「時期さえ来れば、椿には僕らとの関係を知る権利があると思っ
た。それに、楽しかったからお礼……勝手に負けてゴメン」

「そっか……」

予想していた答えと同じだ。僕も最後は似たようなことを考えてい
たから、負けたルシアを攻めるつもりはなかった。第一、ルシアが
本気を出していれば一秒とかからずにブラック スターは地に伏し
ていただろう。

「ルー、絶対デスサイズになろうな。もう後悔はしないように、も
っともっと強くなろう」

「うん。あんなこと、もう二度とあっちゃいけないんだ。」

僕らの記憶の奥深くに眠っている最も悲惨で、悲しい出来事。

「「強くなりたい、世界を……この世界を有無を言わせず
に変えられるだけの力が」」

顔を見合わせずに僕らは拳を合わせた。

「父上、あの兄弟は何者なんだ？」

ここは死神様のお部屋。そしてここにいるのは死神様、デスサイズ、そしてデス・ザ・キッド。

「どうしてそんなこときくの？」

相変わらずひょうきんな話し方だ。……が、ここにいる皆は何も思わない程に慣れてしまっている。

「ルシア・レイルの戦闘能力が異常に高かった。ブラック スターと戦っても、まだ本気を出していなかった。三つ星職人と言われても納得がいく。何故わざわざ死武専に生徒として編入させる必要があったのかも分からない。」

彼女の戦闘能力は以上だった。恐らく、遠距離戦であればタクト・レイルの戦闘力もあれと同じぐらいなのだろう。

「彼らはねえ、特殊な家系に育って特殊な境遇に陥り、闇の中から這い上がってきた努力家サン達だよ。」

分からないといった顔のキッド

「どうということな」時がくればあの子達から話してくれるよ。君が信用されればの話だけだねえ」「」

死神様はもう何も言わない。こうなったらいくら聞いてもきつとほぐらかされてしまうだろう。つまり、これ以上の追求は無駄だ。

「・・・・・・・・・・そうですか。父上、それでは失礼します。」

キッドはもう既にあの二人から要警戒人物として恐れられていることをここにしている人達は知らないのです。

ブラック スターの執念 レイル兄弟の真意 キッドの疑問（後書き）

メツチャ短かったです

でもって、なんか意味深なことを言わせてみました

次回はもうちょっと長く面白く書けるようにしたいです

もう戻ること無き宝物（前書き）

今回もとっても短いです。

でもって、考えていた内容が一切入っていません

初の任務を書きたかったのに・・・

次回は書きたいです

もう戻ること無き宝物

—— ねえタク、タクには夢、ある？ ——

これは、小さい頃の僕？懐かしいな

—— あるよ。ルーは？あるの？ ——

この後に何が起こるのか知らない、あの悲劇を知らない瞳

—— もちろんあるよ。ルーの夢はね……の、立派な武器になること！それから、みんなとずーっと一緒に いることだよ

—— クスッ。僕このころ自分のことをルーって呼んでいたんだっけ。

—— タクの夢は、ルーと一緒にだよ違うのは、……の武器になるっていうことだけ ——

僕らはこの時本当に幸せだった。大事な人がいなくなることなんて知らなかった。

心の底から世界を否定することになるなんて知らなかった。

—— 一緒に強くなろうね ——

僕らの宝物。

奥深くにしまった幸せな記憶。

「・・・・・・・・・・ア・ル・ア・・・・・・・・ルシア！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「タ・・・・・・・・ク・・・・・・・・ト？・・・・・・・・・・どうしたの？」

タクトは答えずに僕の頬に触れた。そこで初めて、僕は自分が涙を流していることに気付いた。

「魔されていた訳じゃないけど、気になったんだ。」

05:52いつもよりも22分も寝過ごした。いつもは寝坊なんてしないから気になったんだろう。

トレーニングの時間無駄にしちゃった。

「ごめん、タクト。すぐ起きて、トレーニングするから。」

寝ちゃった分の練習量を早く取り戻さなきゃ。

「いいよ。無理しないで……顔が泣きそうだよ」

そう言つてタクトは僕のことを抱きしめた。

堪えていた涙が堰を切つたように流れてきてしまった。

「……………夢を……見たの。……………昔の、とても幸せだった頃の夢」

タクトは僕の頭を撫でて頷いてくれる。

「僕らが、夢を語り合つた時の夢」

ふと見ると、タクトも泣いていた。静かに、僕と同じように、僕を抱きしめたまま。

僕もタクトを抱きしめた。

「すごく、幸せで、嬉しくて、それなのに、すごく、すごく、悲しかった。」

僕は、もう知っているから。

あの夢が決して叶うことがないと

言い切つて、僕はタクトを離した。タクトも僕を離した。

僕はタクトの右目から溢れる涙を、タクトは僕の左目から流れる涙を拭った。

もう戻ることはないあの瞬間^{とき}を思っ

涙を流した

宝物

胸の奥深くに仕舞って

僕は歩き続ける

どれだけ辛くても、悲しくても、前を向いて
歩き続けるんだ

もう戻ること無き宝物 (後書き)

本当に短かったですね。

ごめんなさい

次回はがんばります いつも言ってる気がする

依頼（前書き）

段々と、サブタイトルを考えるのが面倒になってきたので超単純にしてみました。

依頼

ガチャッ

「はい、出席を取りまーす」

いつものようにシュタイン博士が教室に入ってきて、出席を取り始める。

「レイル兄弟は……またサボリですかね？」

困ったもんだ。あの二人は編入以来一ヶ月、魂学の授業に一切出ていない。

たまーーーーーーーにある小テストだけ受けて高得点を取ってまた消える

まともに出る授業と言ったら、実技のみ

それまではどこに居るのかさえ分からない

「……困ったものですねえ」

??????????

「どうかしたんですか？シュタイン博士」

マカ？……ああ、声に出してしまっていたのか

「なんでもありませんよ」

これ以上授業に出ないというなら補習も考えたんですが、あの二人、テストの点はいいいんですよね……

本当にどうしてくれよう
は後でいいか

ハアゝ

仕方ない。あの二人

「今から言うペアは死神様がよんでいるんで、今すぐに行ってくださいね。」

マカとソウル、ブラック スターと椿、キッドとトンプソン姉妹」

今日はあの二人も死神様がよんでいるって言うのに

まあ、一応実技になれば出てくるから、そこをとっ捕まえるとするか……

と言うことで、

「今日は予定を変更して、実技をやるんで練習場に行きます。」

生徒達が？な目で見ているのは気にしないでおきましょう

本当にどうして、実技になるといきなり現れるんでしょうね

いつの間にか生徒達に紛れているレイル兄弟を見つける。

「ルシア、タクト、死神様がおよびです。すぐに……………って
既にはいないし。」

まあ、一応伝えたからいつか。

「死神様がおよびなら早くそう言えっの」「」

お待たせしたら申し訳ないじゃんか

僕らは現在死武戦の中を全速力で走っている。

「つ……………着いたー」

切れた息を整える。

「……フー。失礼します」

死神様のお部屋。ドアを開けて入ったところから死神様のいらっしゃる所まで少しばかり距離がある。

僕らはその道のりを走らずに、けれど猛スピードで歩いていった。

「お待たせして、」

「申し訳ありませんでした。」

「死神様」

死神様が目に入ってきた途端に僕らは跪いて頭を下げる。

「顔を上げなさい。べつに怒ってないよ」

死に神様がそうおっしゃるなら。

って言うことで僕らは顔を上げる。

そこでやっと僕らの他にもクラスのメンバーが何人かいるのが目に入った。

「全員揃ったところどころん回はこのメンバーで任務にあたって貰うよ」

レイル兄弟が死に神様に跪いたのを、呆氣に取られて見ていたときだ。

「村が、消えたんだ。突然」

パパがそんな言葉から始めた任務内容の説明。

数日前にとある村が消えた。消えたと言っても建物とかじゃなくて、いるはずの住民が消えたんだ。

理由は不明。だが、恐らく魂を取られたものだと思われる。

住民が消える前日までは村は活気に溢れていて、それまでは魂を取られるような事件はなかったことから、たった一日で全員の魂を奪った。犯人が複数いると思われる。

さらに、調査隊の報告によれば魔女らしき魂を複数、魂感知能力で確認したそうだ。

もしかしたら、奴らは組織化している可能性がある。

「ハッキリ言ってかなり危険な任務だ。俺は他の職人に任せようと言ったんだが、死神様がどうしてもお前らにと仰ったのでお前らに依頼するが、少しでも自信がない奴は今この場で降りろ。迷いがある奴もだ。迷いを抱えたまま向かって死ぬだけだ。」

体が震え出す。怖い。けど、成功すれば、ソウルに魔女の魂を食べさせられるかもしれない。

答えは一つ

「……誰も、降りないんだな？」

きっとこれが最後の警告だ。それでも逃げ出すような奴はいない。

「お前らの仕事は、鬼神の卵と化した魂そして、魔女の魂を狩ることだ。」

「自分達だけでは無理だと思ったら、必ず応援の要請をすること。期待してるよ」

「……………はいつ！」「……………」

今、私達は空にいる。

どうして？

簡単、人の消えた村とやらに向かうため。

「ルシア、きつくない？こんなに沢山の人乗て……」

「大丈夫。タクトこそ、大丈夫？風操るの疲れない？」

今私達は、武器化し巨大化したルシア・レイルに乗って猛スピードで村に向かってる。

「しかしスゲーな、このまま行けば夜には着きそうだぞ。」

死武戦を出たのが四時頃。飛行機などを使えば着くのが、明日の昼になるだろうということで、レイル兄弟から申し出てきたこの方法。

確かに速い。出発してから三時間、上手くいけば二、三時間後には着くかもしれない。

『行こうと思えばこのくらいの距離、三十分もあれば余裕で着く。けど、僕と魂の共鳴ができない君達じゃ耐えられない』

これよりさらにスピードが出るってどんなんだよ

「ルシアと共鳴するだけなら皆出来んじゃない？」

「無理だね。僕らの魂の波長は特殊で協力なんだ。共鳴させようとした時点でこの間のブラックスターみたいにぶっ倒れるのが落ちだ。」

魂の波長なんてみんな違うから、特殊も何もないと思うけど……
……まあいつか。

『もうすぐ町に着く。今日はそこに泊まって聞き込み、明日の朝に村へ発つ』

・・・・・・・・・・・・・・・・そんなこと今初めて聞いたんだけど。

「いつからそういう予定になってたんだよ？」

流石ソウル、私の相棒。私が聞いたかったこと聞いてくれた。

「『この任務を受けた瞬間ときから。』」

ああそうですか。私達に教えるつもりは一切無かったんですね

「なあにを言っていやがる。このまま村に乗り込んで敵をぶっ潰すに決まってるだろう」

全く、ブラック スターの馬鹿。どう考えても、今乗り込んでいくより明日の朝の方がいいに決まってる。・・・・・・・・あつ椿ちゃんが宥めてる。

「ルシア、町見えてきたけど、どの辺りに降りる？」

『あそこ、あの建物の屋上』

「了解」

ごめん全然分かんない。建物なんて沢山あるし、何でそんだけの会話で通じるのかさえ分かんない。

『これから降りる。どこでも良いからしがみつけ。振り落とされなければな。……タクト、気をつけて』

……は？いきなりなんですか？振り落とされる？

「ちょ、ちよつと待つ……」

でも私のことなんてお構いなし。段々スピードが上がってきて、扇が斜めってくる。

（振り落とされるというよりも、滑り落ちそうだよ。って言うか何でタクト君は立って居られる分け？）

みんなが必死にしがみついている中、タクト君は立ち上がって両手を広げていた。

絶対みんな思った。何で立っていられるの？ってね

「着いたよ。はやく降りて。」

……へ？もう着いたの？

一瞬風圧がすごくて、目を閉じていたマカは恐る恐る目を開けてみる

そこはこの辺りで一番高い建物の屋上。

『さつさと降りちゃって。』

周りを見ると、みんなもう降り始めている。私も慌てて降りる。

最後だった私が降り終わると、ルシアちゃんは人の姿に戻った。

「……………様子が変。すごくフラついてる。」

「あつ……………」

そのまま倒れてしまった。が、床に打ち付けられる直前で、タクト君が支えた。

「だ、大丈夫？どうしたの？」

つい聞いちゃったけど、理由は分かっている。今までずっと私達を運んでいたんだもん疲れるに決まってる。

「大丈夫。タクトも疲れてるんでしょう？」

「平気だ……………よ」

こちらもフラついている。平気とは言っても説得力がない。

慌てて、ブラック スターと椿ちゃんを支えに入る。

「無事か？二人とも。」

「「どう見える？」」

「無事には見えない」

二人は自嘲気味に笑ってそのまま気を失った。

「死武専生の方々ですか？」

晩餐 椿の疑問？（前書き）

更新めちやくちや遅れました
ほんつとつにごめんなさい。

作者の身勝手さに呆れ返っていない人はどうぞ読んで下さい

晚餐 椿の疑問？

「死部専生の方々ですか？」

そこに現れたのは、黒いスーツを着た男の人だった。

「そうですけど、誰ですか？」

敵の可能性もある。全員が警戒している中、私が口を開いた。

「死神様並びにそちらのレイル様から伺っております。お部屋が用意してありますのでどうぞこちらへ」

答えになってない。しかもお部屋って何のこと？

「……けど、レイル兄弟が気を失っている今、二人を早く休ませてあげたいし、どこに行けば分かんない。つまり彼についていくほか無い。」

そんなことを考えているうちに真っ黒い男の人は背を向けて下りていつてしまった。

「行くぞ、みんな。今はついて行くしかない。早く二人を休ませねば」

キッド君の一言で、私達はあの真っ黒い人について行くことが決まった。

「この階は今夜貸し切りになっております。ご自由にお使い下さい。」

「……私達が降り立った場所はどうかやら高級ホテルの屋上だったらしい。」

しかも案内された部屋、と言うか階は最上階。多分見た感じでは一番良い部屋ではないかと思う。

「お食事はテーブルの上に用意してあります。何か用事があればお呼び下さい。では失礼します」

ボタン

それだけ言つて真つ黒い男の人は居なくなつてしまった。

.....

「じゃあ、私とブラック スターは、二人を寝かせてきますから、ご飯食べちゃつててください。行こつブラック スター。」

「おう！」

「……………その必要は……………ない」

二人が、レイル兄弟を奥の部屋に運ぼうとしたとき、気を失っていたタクト君とルシアちゃんが目を覚ました。

「椿さん、ありが……とう。もう……大丈夫……夫だから」

説得力皆無。まだフラついている。それでも、さつきよりは幾分マシになっているように見えた。

「大丈夫？ルシアちゃん。」

やっぱりまだ心配だ。椿ちゃんも心配そうな顔をしている

「大丈夫です。マカさん、皆さんも心配をお掛けしてご免なさい。」

「でも、まだ顔色が悪いぞ。明日も移動はルシア達が頼りなんだ。ゆっくり休んでおけて。」

「本当にもう大丈夫だから。リズ、明日だっていつもと同じようにいける」

「けどよう……………」

言葉を続けようとしたリズをルシアがじっと見つめて黙らせる。

「さあ、早くご飯食べよう。」

ルシアのその一言で、私達は真っ黒い男の人が言っていたテーブルのある部屋に向かった。

「にしてもすげえご馳走だな。よくこんだけ準備できたな二人とも、金掛かんかったか？」

「それ・・・なりに掛かったよ・・・けど死神様が・・・仰せつかった任務だからね・・・もし栄養不足で倒れられたりした・・・ら困る。」

タクト君は息も切れ切れにブラック スターの呑気な声に答える。

「失敗するわけにはいかないんだ」

ルシアちゃんの声も重なった。

無表情であんまり喋らないルシアちゃん、いつつも笑顔でルシアちゃんの分まで喋るタクト君。

少し前から感じてはいたけど、この二人の死神様への執着は異常だ。

それに、わたしの名前と武器の形状で私のことを中務家の人間だと気付いた。

彼らはいったい何者なのか、椿の胸の中に一つの疑問が生まれた。

「椿さんどうしましたか？」

「さっきから手が止まっていますよ？」

「「お口に合いませんでしたか？」」

考え事をしている間、手が止まっていたらしい。レイル兄妹に余計な心配を掛けてしまった。

「そんなことないわ、とっても美味しい」

椿はそう言って軽く微笑んだ

「ただ、ちょっと考え事をしていたの。ごめんなさいね」

言葉を軽く付け足し、椿は手を動かし始めた。

確かに美味しい。さっきまでは他のことに気を取られていて味はあまり感じなかった。

ふと周りを見ると、さっきまで綺麗に並べられていた料理が空になり、皿だけが積み重ねられていた。

その横には腹を大きくした彼女のパートナーが居ましたとさ。

晩餐 椿の疑問？（後書き）

次回からもまた遅れることがあるかもですけど、
頑張ります

見捨てないで下さい

でもって感想を下されると、現金なことに喜んだ作者の手は猛スピー
ドで動いてくれるかもです。ハイ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8548m/>

魂喰らいのレイル×2～ソウルイーター～

2010年10月9日22時23分発行